

ポライトネス・ストラテジーとしての聞き手のうなずき

宮崎 幸江

日本語の対面会話における聞き手の行動は、言語・非言語の選択において、話し手との力関係や親しさの程度等の社会的要因の影響を受ける。聞き手のうなずきは、単独で使われた場合は「身振りのあいづち (杉戸 1989)」として言語のあいづちと同じ機能を持ちうる。また、うなずきは間接的で話し手の邪魔にならないという特徴から、話し手のネガティブ・フェイスを守るストラテジーとしての機能も持つ (Miyazaki 2007) と考えられる。本研究は、話し手とは年齢及び親疎の程度の異なる日本語母語話者女性15組の対面会話におけるうなずきの使用を分析し、聞き手は初対面で話し手が年上の場合、音声のあいづちより、非言語行動のうなずきで相手の話への支持や理解を表すが、同世代で親しい相手の場合には、言語的手段を用いる傾向があることを発見した。さらに、異なるコンテキストにおけるうなずきの使用に着目し、ポライトネス・ストラテジーとしてのうなずきの機能についても考察する。
キーワード:うなずき、敬語行動、聞き手の行動、年齢、親疎、ポライトネス・ストラテジー

Listeners' nodding as politeness strategy

Sachie Miyazaki

The present study explores listeners' use of nods in face-to-face conversation. Japanese listening behavior is known by its pervasiveness of verbal expressions. However, non-verbal behavior, such as nodding also plays an important role for the successful communication in Japanese conversation. In this paper, I examine how native speakers of Japanese in different ages listen to 2 minutes instructions given by the same speaker. I found that younger participants reacted more non-verbally compared with the older participants when listening to the instructions spoken by an unknown researcher who was older than them.

While younger participants reacted similarly to older participants when listening to the instructions given by a speaker who was peer. Findings show that young participants employ nods as positive politeness strategy when they want to show respect to the speaker or save speakers' negative face.

Key words: nods, politeness strategy, listening behavior, power, solidarity

1. はじめに

日本語の聞き手の行動は、話し手の話を支持する態度や、話者との調和を重んじる姿勢、協力的な態度、話し手への感情移入などが特徴であると言われている (Maynard 1989; Watanabe 1993)。井出 (2006) によれば、あいづちやうなずきの頻度の高さは日本語のモダリティの一種で、聞き手の心的状態を示すので、日本語母語話者にはコンテキストによっていつでもだけあいづちやうなずきを使用するかについて、共通の認識が存在する。

本稿の目的は、日本語母語話者の女性が「聞き手」としてどのように会話に参加するかを非言語行動のうなずきに焦点をあてて分析し、聞き手のうなずきが話し手に対する敬意を表すポライトネス・ストラテジーとしての機能を持つということ、指示会話における聞き手の行動を分析し提案する。

2. 先行研究

日本語における聞き手の行動は、あいづちに代表される言語行動とうなずき等の非言語行動に分類できる。あいづちなどの聞き手の言語行動に関する研究の豊富さに比べると、非言語行動の研究は今後の発展が期待される分野である。聞き手の行動の研究にとって、非言語行動の重要性は常に指摘されてきた (喜多 1996; 杉戸 1989; 西原 1996; Maynard 1989; Szatrowski 2000) が、言語行動に比べて非言語行動は、実証的研究を行う場合の方法論や技術的な問題から、言語研究において二次的な扱いを受けることが多かったことがその理由と考えられる。

この章では、最初に聞き手の言語行動と非言語行動の先行研究を概観し、敬語とポライネス理論を聞き手の行動との関連から紹介する。

2.1 聞き手の言語行動

近年、あいづちは「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現 (非言語行動を含む)」(メイナード 1993: 58) と定義されるように、ある特定の言語形式についてだ

けでなく、談話レベルでの機能も考慮にいれ、広義に定義されることが一般的になってきた。例えば、杉戸（1989: 50）は、あいづちを「実質的な内容」を含まない言語形式としたのに対し、メイナード（1993: 58）は、聞き手のあいづちに続いて発話順番が入れ替わったものはあいづちとはみなさないとした。このように、言語形式や内容で捉えるか、相互作用で捉えるかで見方が変わる。

あいづちを機能の面から定義することを提案した堀口（1997: 42）は、あいづちを話し手が発話権を行使している間に「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える」表現とした。具体的な機能についても、研究者により見解が異なるが、聞いているという信号、理解しているという信号、否定の信号と感情の表出は最も広く合意を得ている機能（堀口 1997）であるといえる。

日本語と他言語の対照研究では、日本語のあいづちの頻度の高さがしばしば指摘されてきた（Lebra 1976; LoCastro 1987）。Maynard（1989）によれば、日本語のあいづちはアメリカ英語の約3倍使用される。また日本語での会話の習慣は、日本語母語話者が他の言語を話す時にも転移する（White 1989）と指摘されるように、日本語母語話者が英語を話す場合アメリカ人の約2倍のあいづちを使う（Yamada 1992）という結果も報告されている。

あいづちの起こるコンテクストについて、音声的な弱まり（水谷 1988）、音節の切れ目、文末、イントネーションの下降するあたり、ポーズ、終助詞の後（Maynard 1989）などが考えられるが、日本語の会話においてあいづちはそれらの文法または音声的な境界以外でも起こることが報告されている。話し手の発話への重なりについては、日本語の特徴として他の研究者（Hinds 1982; Lebra 1976）にも指摘されている。Clancy et al（1996）は、日中英の3言語を比較分析した結果、日本語の聞き手は他の言語に比べ文末などの文法上の切れ目ではない箇所でも反応する率が高く、その比率は日本語64%に対し、英語28%、中国語20%と日本語が最も高い。つまり、日本語における聞き手のフィードバックのタイミングは英語、中国語の場合とは異なり、日本語独自の合の手を入れるタイミングのルールがあることになる。

そのような日本語特有の話し言葉の構造について、水谷（1988, 1993）は、英語が話し手と聞き手の発話のキャッチボールで成り立つ会話（ダイアログ）であるのに対し、日本語は話し手と聞き手が一緒に一つの談話を作り上げる「共話」であると主張する。話し手と聞き手の区別はあいまいで、聞き手も「話の流れを作る作業に参加する（水谷 1988: 10）」と考えれば、頻繁なあいづちや相手の発話への重なりも理解することができる。

2. 2 聞き手の非言語行動

杉戸（1989）は、うなずきを「身振りのあいづち」と名付け言語のあいづちと身振りのあいづちの関係を分析し、うなずきの内言語のあいづちと共起するものは個人差が小さく言語のあいづち全体の79%である一方、言語のあいづちを伴わない無言のうなずきは個人差

が大きいことを発見した。Maynard (1989) は、話し手・聞き手双方の使用するうなずきの頻度と機能を分析し、日本語は英語の会話の約2倍の頻度でうなずく他、話し手の方が聞き手より多くうなずく（聞き手 67%；話し手 33%）と述べている。うなずき使用の性差についてKogure (2003) は親しい日本人大学生男女（18歳～25歳）の同性同士の会話ではあいづちの頻度や種類について男女差はほとんど見られないが、うなずきは女性の方が多く使用していると報告している。

宮崎 (2001) は日本語母語話者女性3人（25歳、30歳、37歳）が、別々に同じ話者（35歳）から話を聞いた際の会話の録画（各15分）を分析した。その結果、あいづちとうなずき（言語のあいづちを共起しない）のうちどちらを多く使うかは個人差があるが、あいづちとうなずきの時間当たりの総数は近いことを発見した。つまり、日本語の聞き手の行動において言語のあいづちを伴わないうなずきは、あいづちと同じ機能を果たしており、そのどちらを選択するかは個人によって異なる解釈できる。また、3人の被験者の内、年齢が一番若い被験者が最もうなずきを多く使用し、最年長の被験者が最も言語のあいづちを多用したことから、言語、非言語の選択には聞き手の年齢や、その他の要因も影響している可能性を示唆している。

2.3 うなずきの機能とコンテキスト

Maynard (1989) は、対面会話における話し手と聞き手の頭の動きを分析し、その機能を7つに分類した；①同意 affirmation, ②発話順番の終わりや交替を告げる claim for turn-end and turn-transition, ③発話順番の主張 pre-turn and turn claim, ④発話権交代に伴う間を埋める filling turn-transition period, ⑤あいづち back channel, ⑥リズムとり rhythm taking, ⑦否定（横ふりの場合）negation in the case of horizontal head movement。これらの頭の動きの内、聞き手に見られる動きは、⑤のあいづちと④の埋め草としての機能が主な機能であるとした。

では、言語のあいづちと非言語のうなずきの機能にはどのような違いがあるのだろうか。またどちらか一方にしかない機能は存在するのか。宮崎 (2002) は、対面会話と電話の会話における聞き手のあいづちを分析した。その結果、電話の会話では聞き手は約1.5倍多く相槌を打つが、使用される相槌の種類には差はないことがわかった。視覚情報に頼ることができない電話の会話では、聞き手は相手の話を聞いているという信号を送るために、あいづちを多用すると考えられる。つまり、うなずきの機能は基本的には、言語手段によって置き換えが可能であると言える。

Maynard (1989) は、聞き手のうなずきは、あいづちと共起する他、発話順番が変わる間に観察されると報告したが、うなずきと他の非言語行動の関係も次第に明らかになって来た。Szatrowski (2003) は、日本語の話し手は、発話の中盤から聞き手に視線を移し最後の述部に差し掛かったあたりで、直視とうなずきを聞き手に向け、聞き手のあいづちとうなずきを喚起するという相互作用の構造を発見した。さらに、坊農・片桐 (2005) は、話し

手は聞き手に向け発話終了直前に視線配布を開始し、聞き手はそれに対応してうなずき等の応答を行うという対面コミュニケーションの構造を、叙述的視点と相互行為的視点からの説明を試みた。聞き手のうなずきが起こるコンテクストは、言語だけでなく視線などの非言語表現が関係することが実証された。

Kita&Ide (2007) は、うなずき、あいづちの使用されるコンテクストに終助詞が絡み、日本語特有のモダリティ表現や話し手と聞き手の調和を生む共話的構造に、重要な役目を果たすと述べている。また、うなずきとあいづちが、次のあいづちとうなずきを引き起こす構造をループシークエンスと名付けた Kogure (2007) の研究は、今後の聞き手の行動研究にとって分析の対象を言語形式としての相づちからうなずきや視線まで広げて捉える必要性を示唆している。

2. 4 聞き手の行動と社会的要因

2. 4. 1 日本語における敬語

井出 (2006) によれば、敬語は「上下、親疎関係を区別し、場所の改まりを示すもの」であり、上下関係は通常年齢や社会的地位などで表わされ、親疎関係は知り合ってから長さや親しさ、または「ウチ・ソト」の関係でも表わされるとしている。近年、伝統的な敬語に対して「敬意表現」という新しい言葉遣いの枠組みが国語審議会 (2000) によって提案され、21世紀社会の都市化・国際化・情報化などを考慮して提言された (井出 2006)。

敬意表現は「コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する (国語審議会答申 2000)」と定義された。

聞き手の行動における敬意表現は、言語形式としては「はい」「そうですね」などの選択が挙げられるが、それらの言語形式の選択の他にも、表現の頻度や、言語行動か非言語行動かという選択も含め相互行為全般として捉えることによって、敬意表現の構造が明らかにできると考えられている。

2. 4. 2 聞き手の行動とポライトネス

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は、人間の言語行動の普遍性を特徴とする。ポライトネス理論では、人間の持つ欲求をポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスに分け、それぞれを「発話することにより理解されたいという欲求 want to be understood by saying something」と「邪魔されたくない欲求 want not to be disturbed」と説明した。

井出 (2006) によれば、敬語使用は敬語を使うことによって相手への敬意を表現するポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての機能を持つ。また、敬語というよりフォーマルな言語形式を選択することによって、相手との距離をおく、つまり間接的な手段を取ると解釈すれば、敬語使用はネガティブ・ポライトネスとしても機能する。

日本語のように話し手と聞き手が談話の中で交差する「共話 (水谷 1993)」的な構造を持

つ言語の場合、会話参加者が互いのフェイスを守りながらコミュニケーションをとる必要がある。

聞き手のフェイスとは相手に良く思われたい、好意的な態度を示したいという欲求である。一方、話し手には、自分の話を理解してもらいたい、またその反応を得たいという欲求（ポジティブ・フェイス）と、自分の発話権を保持したいという欲求（ネガティブ・フェイス）が働くと考えられる。聞き手が相づちなどの言語的な手段で応答することは、話し手のポジティブ・フェイスを満たすことになり、間接的な方法として相手を邪魔しない非言語の手段を用いて応答すれば、ネガティブ・フェイスを守ることになる（Miyazaki 2007）。

Nakane（2006）も、非言語行動をポライトネス・ストラテジーであると主張する。Nakane は日本語母語話者が英語話者と英語で会話をする際に使用した沈黙を、ポライトネスの観点から分析した。日本語話者は沈黙を双方のフェイスを守るためのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして使用するが、文化の異なる英語話者からそのような日本語話者の態度は思いやり（rapport）の欠如であると解釈されると分析している。英語圏と日本では、沈黙に対する文化的価値が違うためにポライトネス・ストラテジーの解釈が異なるという Nakane の発見は興味深い。

井出（2006）も、日本文化におけるコンテキストの意味は西洋のそれとは大きく異なるということを主張しているが、沈黙に関して言えば、ポライトネス理論の普遍性は、日本語の文化的背景には応用できないと考えられる。

2. 4. 3 聞き手の行動バリエーション

図1は、複数の社会的要因の程度によって構成されるコンテキスト（Tannen 1993）をもとに宮崎（2007）が修正した図である。図1の縦軸はパワー、横軸は親疎関係を表わす。B面はパワー差が著しく、会話参加者の間に心的距離がある関係、例えば教師と学生の関係に代表されるコンテキストである。一方、パワー差があるが心理的に近いA面のコンテキストの代表的なものとして、親子の会話が例にあげられている。図では、A面B面が、パワーの差が大きく、下（C面・D面）に行くほど、対等な関係を意味する。Tannen によれば、ある対話者の関係がどのコンテキストに位置づけられるかは、文化によって異なるとした。例えば、雇用主と雇用者の関係は、米国の文化ではB面に位置づけられるが、日本文化におけるウチとソトの関係から見れば、A面に位置づけられる。もちろん、親子の親しさと同じ会社の一員であるという親しさは、本質的に異なることは言うまでもないが、現実の言語使用の裏には、通常複数の要因が絡み合う。会話参加者は、会話の流れの中で、参加者との力関係や親しさを相対的に判断し最も適切な言語行動をとると考えられている。宮崎（2007）は、話し手と聞き手の間に存在する力関係（＝上下関係）を、年齢とその会話における役割という異質の条件が相対的に考慮された結果構成される4つのコンテキストに分けて、聞き手の行動バリエーションを説明しようとした。

初対面の研究者（41歳：話し手）と被験者（19～61歳：聞き手）の対面会話のコンテク

ストを図1にあてはめると、それぞれのコンテキストに分類される聞き手の行動の特徴は以下のように表される。

B面（フォーマル、話し手の方が聞き手より年上、年齢差約20）

聞き手の行動の特徴：言語のあいづちは少なく、うなずきを多用。

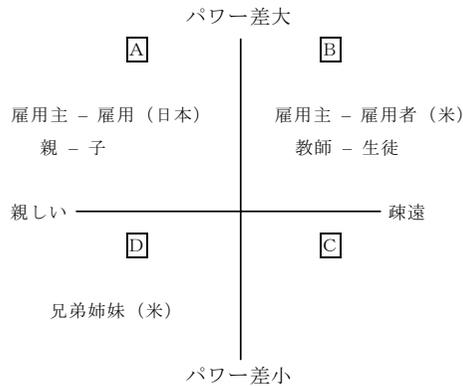
C面（フォーマル、初対面、話し手より聞き手の方が年長）

聞き手の行動の特徴：言語のあいづち多用し、うなずきが少ない。

D面（インフォーマル、親しい、話し手と聞き手は同世代）

聞き手の行動の特徴：言語のあいづち多用し、うなずきが少ない。

図1：パワーと親しさによるコンテキスト



宮崎（2007）の分析について方法論上の問題を指摘するとしたら、会話データとして使われた会話の種類が一種類に統一されていないことが挙げられる。フォーマル会話(B面C面)として集めた会話データが、初対面の研究者から聞き手（被験者）が、研究参加のための説明を受けるいわゆる「指示会話」であるのに対し、インフォーマル会話（D面）の会話は親しい同世代間の雑談（話題：修学旅行）であるため、パワー差と親しさ以外に会話の目的の違いが聞き手の行動の差に影響を及ぼしている可能性がある。

2. 5 本稿の目的

本稿は、日本語母語話者女性が聞き手として会話に参加する際に非言語行動のうなずきをどのように使用するかを、話し手と聞き手の関係（パワー・親疎）によって構成されるコンテキストでの、比較を行なう。比較を行なうコンテキストは、上記の図1におけるB面、C面、D面とする。宮崎（2007）のB面及びC面については実験結果「話し手（研究者）と聞き手（被験者）が初対面コンテキストでは、被験者の年齢が高い程、言語表現の頻度が高く、年齢が若い程うなずきが多い」から、親しい間柄の同世代から指示をうける会話において、どのような言語行動を

とるかを分析し、うなずきがポライトネス・ストラテジーとして、機能する可能性について論じる。

3. 方法

3.1 被験者

初対面会話に協力した被験者は、話し手（研究者41歳）と聞き手として日本語母語話者の女性10人（2グループ各5名：19～21, 47～61）である。参加者は「東京、神奈川、千葉、埼玉のいずれかの出身であること」を条件とし、知り合いの紹介で集め、研究者とはデータ採取の際に初対面となるようにした。友達会話の被験者の女性は、話し手（20歳）1名と聞き手（19～20歳）5名で同じく関東出身で関係は同じゼミナールに在籍する同世代の親しい間柄である。

表1. 被験者と世代グループ

	人数	年齢 性別	話し手	話し手との 関係
初対面会話 グループ1	5	19～21歳 女性	研究者（41歳）	初対面 年上
初対面会話 グループ2	5	47～61歳 女性	研究者（41歳）	初対面 年下
友達会話 グループ3	5	19～20歳 女性	クラスメート（20歳）	親しい 同世代

3.2 手順

初対面会話は、話し手となる研究者（41歳）がそれぞれの被験者と1対1で事前に設定された場所で会い、自己紹介と実験への参加方法について約2分間の指示を与えた。その際の会話を斜め前方から録画しデータとした。

友達会話は、クラスメートの1人が他のクラスメートに対しゼミ教員から指示された内容を、個別に伝える会話を初対面会話と同じ方法で録画した。指示の内容は、予め研究者が用意し、話し手となる被験者が、それを暗記し練習した後、5人に同じように説明した。しかし、実際の会話では、極力自然の会話に近づくためにスクリプトの文を言葉どおりに伝えるよりも内容を重視するように指示した。

3.3 データ

本実験のデータは、指示会話を初対面の人物から聞く初対面会話（グループ1, 2）と親しい同世代の友人から聞く友達会話（グループ3）のビデオ録画である。初対面会話は、録画の内10人の被験者全てにほぼ同じ指示を出している2分間を選び、計20分間の会話を非言語行動（うなずき）も含めて文字化し、言語・非言語行動に分け種類別に数量化した。

同世代会話（グループ3）は、2分間のスクリプトを使ったが、話す速度や聞き手の反応が5組の間で異なり、実際の録画データの長さに95秒から144秒（平均94.6秒）とばらつきが出たため、数量データを2分間あたりに計算して他のグループとの比較を行った。

3. 4 分析方法

宮崎（2007）、Miyazaki（2007）と同様に、聞き手の行動をいわゆるあいづち詞（堀口 1997）と、その他あいづちと同じ機能を持つ表現、そして身振りのあいづち（杉戸 1989）としてのうなずきとした。これらの行動を包括する概念としてリアクティブトークン（reactive token Clancy et al. 1996, 以下RTとする）を用いた。

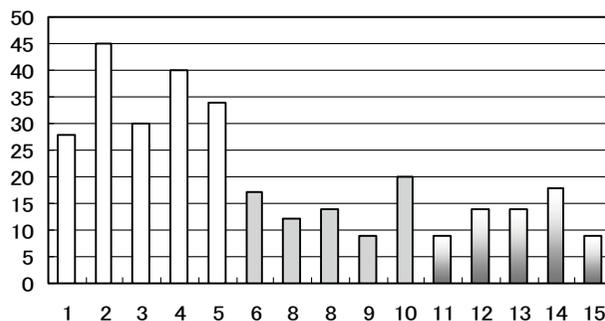
本稿で分析対象としたRTは、「はい」「うん」のような音声的表現以外に、①あいづち詞、②リアクティブ表現（そう・ほんとう・すごい他）、③繰り返し、④先取り、⑤ターンのはじめのあいづち、⑥笑い、⑦コメント、⑧言い換え、⑨うなずきを含む。①から⑧までを言語のRT、⑨を非言語のRTと呼ぶ。

言語のRTは、うなずきと共起することが多いと言われている（杉戸 1989;メイナード 1989）が、本稿では、うなずきが言語のRTと共起した場合は、聞き手の言語行動を強調する二次的な行動と考える。例えば、同意の機能を持つ「はい」がうなずきと共起する場合は、聞き手がより強く話し手の意見に賛同していることの表れであると解釈し、分析の対象に含まなかった。

4. 結果

4. 1 うなずきの頻度

グラフ1は、15名の個々の被験者が2分間に使用したうなずきの総数を表す。世代グループとしては、被験者1～5（グループ1：19歳～21歳）の使用頻度が総数177と最も高く、最も低いのは、被験者11～15（グループ3：19歳～20歳）の総数64である。うなずきの頻度を、グループ総数及びグループの属性について比較すると、以下のようになる。



グラフ1. 個々の被験者の使用したうなずきの頻度

グループ順

グループ1 (177回) > 2 (72回) > 3 (64回)

グループの属性

[-親しい, +年齢差, +役割差] > [-親しい, -年齢差, +役割差] > [+親しい, -年齢差, +役割差]

グループ総数は、初対面学生グループが最も多くうなずきを使用し、次に初対面年上グループ、親しい同世代グループの順となったが、後の2グループの差は小さいことがわかる。グループの属性を表すために、親しさ、年齢、役割を用いた。[+年齢差] は話し手の方が聞き手より年上、[-年齢差] は話し手と聞き手の年齢差がないか、若しくは話し手より聞き手の方が年上の場合をさす。[+役割差] は、実験の場での役割をさす。話し手は、聞き手に対して指示を出すと言う意味でも、研究者という意味でも、実験の場において、力を持つと考える。年齢も考慮した訳は、初対面の被験者にとって話し手（研究者）が自分より年上かどうかは、日本社会の慣習として聞き手との力関係に影響を与える要因であると考えた。グループ属性に関する比較では、話し手に対して親しくない（初対面）場合は、年齢差が大きいほどうなずきは多く使用され、年齢差や役割差が同じ場合は、親しくない場合（初対面）の方が親しい間柄の場合よりうなずきの使用が多いことがわかった。

4. 2 言語行動と非言語行動の関係

表2は、2分間に使用された言語のRTとうなずきを世代グループ別にまとめたものである。初対面の研究者から、指示を与えられるという指示会話のコンテキストにおける聞き手の行動は、言語のRTと年齢は正の相関関係にあり ($r=0.49$)、うなずきも弱い負の相関関係 ($r=-0.37$) がある。ところが、初対面ではなく親しい同世代の話し手から指示を受ける場合、初対面の場合の聞き手の年齢が最も高いグループの型に近いことがわかる。

表2. 2分間に使用された言語のRTとうなずきの世代グループ別総数

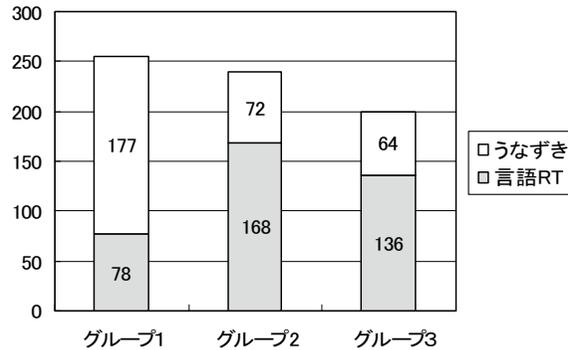
	聞き手	言語のRT	うなずき	計
グループ1 (19歳～21歳)	初対面・年下	78	177	255
グループ2 (47歳～61歳)	初対面・年上	168	72	240
グループ3 (19歳～20歳)	親しい・同世代	136	64	200

言語RTとうなずきの総数はグループ順では、

グループ1>2>3

以上の結果は、うなずきと同様のパターンを示すことがわかる。つまり、指示会話を聞くという言語行動においては、「聞いている」ということを第一に示すうなずきが最も重要な聞き手の行動であるということが出来る。

グラフ2. 世代グループ別言語RTとうなずきの総数



グラフ2は、聞き手の使用したRTの合計をグループ別にしたものである。初対面会話では、聞き手の年齢によって言語と非言語RTのバランスが異なるが、親しい若者同士の会話では、初対面で聞き手の方が話し手である研究者よりも年上であるコンテキストの場合と類似している事実は興味深い。次章では、以上の実験結果をもとに、うなずきの機能について考察し、日本語の指示会話における聞き手の行動のバリエーションを親疎と上下関係から考察する。

5. 考察

5.1 うなずきの使用頻度

話し手（研究者41歳）から指示を聞く会話において、年齢差が最も大きい世代グループ1の被験者（19歳～21歳）が、研究者より年齢が上のグループに比べて最もうなずきを多く使用し、しかも話し手との上下関係が存在しない同種の会話ではうなずきの使用頻度が低かった。

うなずきの多用は若者の世代的な特徴というよりも、本実験のコンテキストに適切な聞き手の行動バリエーションであると言うべきであると考えられる。なぜなら、同じ世代の被験者（グループ4）が、同世代から指示を受けるというコンテキストにおいては、言語行動を多用するという全く異なる行動パターンをとっているからである。次節でうなずきの持つ機能について考察する。

5.2 うなずきの機能

うなずきには、言語のRTと共起するものと音声を伴わない無言のうなずきが存在する。Maynard (1989) も指摘するように、本実験においても、言語のRTと共起するうなずき

の機能は、言語のRTの強調であり、言語のRTと同じ機能を持つと解釈した。

その理由は、うなずきが言語のRTと同時に起こる場合、言語のRTとは別の機能を持つとは考えにくいということと、言語のRTにうなずきが付随して起こる率は、グループ4の会話が一番高かったからである。グループ3は親しい同世代の話し手の話を聞くと言う会話なので、4つのコンテキストの中で相手への共感や感情を最も表わすべきコンテキストである。指示を聞くという目的がある以上、聞き手としていわゆる雑談とは違い「共話」的な応答をすることは適切とは言えない。話し手との親しさを示す手段は、言語手段を多用することと、インフォーマルな言語表現（例：うん）の選択と、ジェスチャーや微笑みなどの他の非言語行動を使うこと等である。うなずきを言語RTと共起させることも、その手段の一つであると考えればグループ間の差が説明できる。実際の談話データから見てみよう。

会話1はグループ3の会話からの抜粋である。被験者15は、計39のRTの内、言語対非言語は31対8で、言語のうち70%はうなずきと共起した。Nは言語RTと共起したうなずきを示し、Nは無言のうなずきを示す。

会話1

- 1 S: なんか自分の修学旅行についてでもいいし
- 2 L: あああ
- 3 S: その家族のだれかのでもいいんだけど
- 4 L: うんうん
N
- 5 S: 取りあえず修学旅行のをしてもらって
- 6 L: うん
N
- 7 S: 途中で会話のネタが尽きちゃったら
- 8 L: うん
N
- 9 S: なんか、これから行く旅行の話とか
- 10 L: うん
N
- 11 S: 今までいった旅行の思い出とか
- 12 L: うん
N
- 13 S: 取りあえず旅行に限定してほしいのね
- 14 L: うん
N

次の会話の被験者17は、計39のRTの内、言語対非言語は31対8で、言語のうち70%はうなずきと共起した。

会話2

- 1 S: だから自分の修学旅行についてでもいいし
- 2 L: うん
N
- 3 S: お母さんのでもいいし
- 4 L: N
- 5 S: 家族の誰かのでもいいのね
- 6 L: うーん
N
- 7 S: で 話題がちょっと尽きちゃったら
- 8 L: うーん
N
- 9 S: これから行く旅行の話とか
- 10 L: N
- 11 S: 旅行の思い出とか、とりあえず何か旅行に限定してもらいたいのね
- 12 L: うんうん
N

会話1と2では、それぞれ6回ずつうなずきを使用した。会話1はそのすべてが言語RTの相づち詞と共起したものであったが、会話2では6回のうち2回は言語RTを伴わずうなずきのみが観察された。会話1と2の例に見られる言語RTと共起したうなずきは、うなずきがなくても話し手の発話には影響はないと考えられる。機能的には言語RTの機能を補足、または強化していると考えられる。

では、非言語行動のみの無言のうなずきはどのような機能を持つのか。無言のうなずきも会話1と2の出現場所を見る限り、基本的には言語RTと同じ機能を持つと言えるのではないだろうか。井出（2006）が指摘するように、あいづちやうなずきが、聞き手の心的状態を表すモダリティを持つと考えるなら、言語RTとうなずきを共起するものが最も強い聞き手のモダリティ表現であると考えられる。逆に、うなずきのみは最も消極的なモダリティ表現ということになるのであろうか。筆者は、うなずきには最も消極的な表現としての機能と同時に、コンテキストによってはポライトネスの表現としての機能を持つことを提案する。次節で、本実験のコンテキストにおいて、うなずきがどのように使われたかを検証し、敬語行動としての機能について考察する。

5.3 ポライトネスとうなずき

本実験において、なぜグループ1の若い世代はうなずきを多く使ったのであろうか。LoCastro (1987) は、日本語における聞き手のあいづちは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると分析している。ポライトネス理論における人間の欲求のうち、ポジティブ・フェイスは自ら発話し参加することによって達成される。うなずきも同様に聞き手にとってはポジティブ・フェイスを満たす。あいづちとうなずきの違いは、うなずきは話し手のネガティブ・フェイス（邪魔されたくない欲求）を守ることができるという点にあると考える。年齢の若い被験者が初対面の自分より年齢年齢や社会的地位が高いいわゆる「目上」話し手の話を聞く際に、うなずきを多用する理由は、双方のフェイスを守りつつ丁寧さを失わないという理由からであると分析する。

一方、同世代から指示を得るという会話において、若い世代はうなずきという非言語行動ではなく、言語RTの方を多く選択している。これは、非言語のうなずきによる間接的な会話参与ではなく、より直接的な手段で相手に「聞いている」ということを表そうとしているポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと言えよう。

ところで、日本語における敬語は、ポライトネス理論の普遍性とは異なる枠組みで議論されるべきであると指摘されてきた (Ide 1989; Matsumoto 1989)。筆者も、ポライトネス理論がそのまま全ての言語に普遍的に応用可能かどうかについて、疑問の余地はあると考える。しかし、聞き手が言語と非言語のどちらの応答を使用するかを選択は、日本語の敬語使用に見られる儀礼的な要素というより、コンテクストに適切な手段を選択するというストラテジ的な要素が強いと考える。それ故、聞き手のうなずき自体は、話し手に対する敬語行動または、敬意表現の表れであるとも言えるが、言語・非言語の選択は個人の自由な選択の範囲にあり、コミュニケーション・ストラテジーの一種であると考えられる。

5.4 社会的要因とバリエーション

最後に、本実験の結果をもとに指示会話における聞き手の行動バリエーションをまとめる。図2に、指示会話を聞くという言語行動における聞き手の行動を、パワー差と親疎関係で表わされる4つのコンテクストに分けてそれぞれの特徴を記載した。初対面会話の話し手と聞き手の関係は全員右の面 (B/C面) に位置し、グループ1 (19歳～21歳) と話し手 (41歳) の関係は、最も上下関係が大きいのでB面の上部に、グループ2 (47歳～61歳) の被験者は話し手より年齢が上になるが、研究者と被験者と役割上の力関係が存在するため、年齢差と役割差が相殺されてC面の下方に位置すると考えられる。

そして、グループ3 (19歳～20歳) が、クラスメートである話し手 (20歳) から指示を受ける友達会話は、D面の下方に位置すると考えられる。以上の上下関係と親疎関係の査定は、個人差があるだけでなく、同じ話し手と聞き手であっても話の内容や会話の流れの中で常に変化するという意味で相対的な関係である。

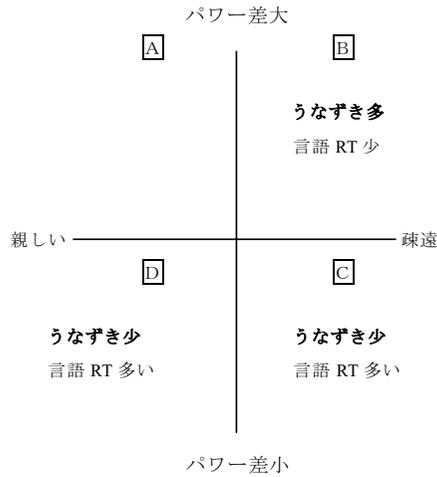


図2：うなずき使用と上下関係と親疎によるコンテキスト

図2は、聞き手の行動の特徴を示している。年齢が若いほど、非言語を多く使うが、それは会話の種類（指示会話）のためでも、聞き手の年齢のためではないことが判明した。しかし、うなずきの多用が話し手との年齢差によるものか、疎の関係に因るものか、またはその両方によるものかは、今回の実験では明らかにすることはできなかった。

また、日本語母語話者の指示会話を聞く際の行動は、年齢に関わらず話し手との上下関係と親疎関係が似ているコンテキストでは、聞き手の行動に世代差はないことを示唆することが明らかになった。

6. おわりに

本稿は、対面の指示会話を上下関係・親疎の程度から4つのコンテキストに分け、それぞれにおける聞き手の行動のバリエーションを非言語行動に焦点を絞り分析した。その結果、初対面で目上の話し手から指示を受ける場合と、親しい同世代の話し手から指示を受ける場合に、言語・非言語の選択の差が最も顕著であることが明らかになった。初対面の場合、話し手との年齢が離れる程聞き手はうなずきを使用する率が高くなる。逆に親しく年齢差が小さくなる程、言語行動の比率が高くなる。

この実験結果を元に、聞き手のうなずきは、言語のあいづちの代替としてだけでなく、間接的に敬意表現を行うポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての機能を併せ持つと提唱した。

本稿では、被験者は全て女性のみの実験であったため、果たして男性がうなずきをポライトネス・ストラテジーとして使用するかどうかは、確認できなかった。男性の聞き手の行動

については、今後同様の方法で調査を続けて行きたい。

*本研究は、平成19年度・20年度科学研究費補助金による「日本語における聞き手の言語・非言語行動のバリエーション研究」(若手スタートアップ、課題研究番号 19820057)の研究成果の一部である。

参考文献

- 坊農真弓・片桐恭弘 (2005). 「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点—ジェスチャー・視線・発話の協調」『社会言語科学』 Vol.7, No.2, 3-13
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Clancy, P. M, S. A. Thompson, R. Suzuki, and H. Tao (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of pragmatics* 26. 355-387.
- Hinds, J. (1982). Japanese conversational structures. *Lingua* 57: 301-326. North-Holland Publishing Company.
- Ide, S. (1989). Formal forms and discernment: Two neglected aspects of linguistic politeness. *Multilingua* 8-2/3: 223-248.
- 堀口純子 (1988). 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』 64. pp. 13-26.
- 堀口純子 (1997). 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- Ide, S. (2004). Exploring women's language in Japanese. In M. Bucholtz. *Language and woman's place: Revised and expanded edition*. Oxford.
- 井出祥子 (2006). 『わかまへの語用論』 大修館書店
- 喜多壮太郎 (1996). 「あいづちとうなずきから見た日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』 15, pp. 58-66
- Kita, S. & Ide, S. (2007). Nodding, *aizuchi*, and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationships. *Journal of Pragmatics* 39: 1242-1254.
- Kogure, M. (2003). Gender differences in the use of backchannels: Do Japanese men and women accommodate to each other? Unpublished Ph. D.dissertation, University of Arizona.
- Kogure, M. (2007). Nodding and smiling in silence during the loop sequence of backchannels in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 39: 1275-1289.

- 国語審議会答申 (2000). 「現代社会における敬意表現」
- Lakoff, R. (1975). *Language and women's place*. New York: Harper and Row.
- Lebra, T. S. (1976). *Japanese patterns of behavior*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- LoCastro, V. (1987). *Aizuchi*: A Japanese conversational routine. In L. E. Smith (ed.) *Discourse across culture*. 101-13. New York: Prentice-Hall International.
- Matsumoto, Y. (1989). Politeness and cultural style: observations from Japanese. *Multilingua* 8 (2/3), 207-221.
- Maynard, S. (1989). *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex.
- Miyazaki, S. (2007). Japanese women's listening behavior in face-to-face conversation: The use of reactive tokens and nods. Hituji Shobo Publisher: Tokyo.
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育における話し言葉の実態」『金田一春彦博士古希記念論文集2』 pp. 261-279. 三省堂
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7 (12), pp.4-11.
- 水谷信子 (1993) 「共話から「対話」へ」『日本語学』12-4. 明治書院
- 宮崎幸江 (2001) 「身振りのあいづちとしての聞き手のうなずき」『日本語教育学会春季大会予稿集』
- 宮崎幸江 (2002) 「電話と対面会話における聞き手のあいづち」『小出記念日本語教育研究会論文集』10。
- 宮崎幸江 (2007) 「日本人女性の聞き手としての行動：リアクティブトークンとうなずきの使用」『言語学と日本語教育V』くろしお出版157-174
- メイナード・K・泉子 (1993) 『日英語対照研究シリーズ (2) 会話分析』くろしお出版
- Nakane, I. (2006) Silence and politeness in intercultural communication in university seminars. *Journal of Pragmatics* 38: 1811-1835.
- 西原鈴子 (1996) 「文化接触における非言語行動」『日本語学』31. 明治書院
- 杉戸清樹 (1989) 「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—言語行動における非言語的表現—」『日本語教育』67, pp.48-59
- Szatrowski, P. (2000) Relation between gaze, head nodding and aizuti 'back channel' at a Japanese company meeting. *Berkeley Linguistics Society* 26: 283-294.
- Szatrowski, P. (2003) Gaze, head-nodding and aizuti 'back channel utterances' in information presenting activities. In P. Clancy (ed.). *Japanese/Korean Linguistics* 11: 119-132. Stanford: Center for the Study of Language and Information.

- Tannen, D. (1993) The relativity of linguistic strategies: Rethinking power and solidarity in gender and dominance. In D. Tannen (ed.). *Gender and conversational interaction*, 165-188. Oxford: Oxford University Press.
- Watanabe, S. (1993) Cultural differences in framing: American and Japanese group discussions. In Deborah Tannen (ed.). *Framing in discourse*. 176-209. New York and Oxford: Oxford University Press.
- White, S. (1989) Backchannels across cultures: A study of Americans and Japanese. *Language Society*. 18: 59-76.
- Yamada, H. (1992) *American and Japanese Business Discourse: A Comparison of Interactional Styles*. Norwood, NJ: Ablex.